

1 【あかなめ】

ぼくが、懐爺の祠の入口から、顔をのぞかせると、くらい奥から懐爺のしぶい声がきこえ、それから、黄色い乱杭歯（らんぐいば）がみえ、つづいて、垢（あか）で黒くなった、やさしい顔がでてくるのでした。

いつもほとんど、そうなのでした。

懐爺の両眼は、目蓋（まぶた）でふさがれ、ひどくつぶれた鼻は、むかし若いころ、村人たちに私刑（しけい）にあった、なごりだときいています。

背中までかかっている、白髪（しらが）まじりの髪は、きったりすいたりしてあげたい、気分がわきおこる、むさくるしさでした。

着ているものといえば、むかしは衣類（いるい）だった何かを、身にまとっているふうなものでした。

懐爺の凶体（ずうたい）は、餓死（がし）すんぜんの巨大な糞（ひぐま）をおもわせたものです。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「また、おばけがでたのですか」

そう懐爺はききました。

ぼくの家風呂場（ふろば）は母屋（おもや）から、三十歩はなれたところにありました。

とうぜん、風呂にはいるためには、そこまで歩かなければいけません。

風呂場は小さな小屋で、着替える場所もないので、ぼくは裸（はだか）でもどってくるのです。

冬はきついが、夏はもったいやでした。

風呂場は、日当たりのわるいところにあって、風呂おけは古く汚く、糊（のり）をぬりつけたかんじの、垢が、こびりついていました。

とくに夏場は、臭いが強く、その臭いは、垢のせいだけではなく、風呂おけのまわりに、蠱（うごめ）いている、蛞蝓（なめくじ）や、蝦蟇（がま）の臭いでもあったのです。

ぼくはひとしきり、風呂場のおぞましさを語ってから、気になってしかたがないことを、つけました。

「さくばんも、わしのせなかさ、はりついてくるんや」

「そうですかそうですか、それはせつなかつたですね」

懐爺は、汚い手で、ぼくの背中をなでながら、いいました。

「そいつは、蛞蝓でも蝦蟇でもない。わたしもこどものころは、ずいぶんやられました。そいつは【あかなめ】なんですよ」

「【あかなめ】」

ぼくは、鸚鵡（おうむ）がえしで、いいました。

「【あかなめ】とは、なんじゃ」

「汚い風呂場専門（せんもん）の、おぼけでしてね。垢をなめにやってくるんです。むかし、わたしのともだちだった平助は、風呂につかっているとき、あかなめにひどくなめられて、とけてしまいましたよ」

ぼくの背中に、また【あかなめ】が、はりついた気がしました。

「おそろしいのう」

「心配はいりませんよ。【あかなめ】の臭いなんか、わたしの臭いになれている金ちゃんなら、平気でしょう。それに、風呂おけを毎日洗ってお日様に干して、きれいにしておけば、【あかなめ】は、けっしてでてはこないものですから」

「だれが、やるんじゃ」

「金ちゃんが、やるんですよ」

懐爺は顔を近づけます。

懐爺の臭いには、ぼくはたしかになれていました。

それからのぼくは、風呂場当番（とうばん）をかってでて、風呂おけを毎日みがいたものです。

たしかに【あかなめ】は、でてこなくなりました。